實業 新日本讀本 卷六

教科書文庫
4
810
44-1914
2000054285

43332
教科書文庫
4
810
44-1914
20000
54285

資料室
中央図書館
広島大学
教
54285
図書

教科書文庫
4
810
44-1914
2000054285

資料室

375.9
Roll

六盟館編輯所編纂

實業 新日本讀本

東京 合資會社 六盟館

広島大学図書
2000054285

實業 新日本讀本 卷六

目次

一 近郊の秋色……一
二 公德と私德……五
三 採蕈記……一三
四 農人形……一三
五 演說について……一九
六 蟲の聲……二二
七 桃山時代の工業……二三
八 白石篤朋……二六

九　漢詩二篇……三〇
一〇　運命（一）……三〇
一一　運命（二）……三八
一二　座右の銘……四三
一三　物薄而情厚……四四
一四　乃木將軍……四五
一五　毀譽……五一
一六　吾家の富……五七
一七　孺子可敎……六〇
一八　紹介・注文……六三
一九　歲暮……六五
二〇　滿洲の事業……六八
二一　尊德翁夜話……七五
二二　青木方齋……八〇
二三　地方自治……八二
二四　狩野芳崖……八八
二五　駑馬千里……九五
二六　冒險……九六
二七　島國の利害……一〇〇
二八　生徒諸君……一〇七

卷六目次終

*東京市本郷區駒込（菊の名所）

歸＝還

實業

新日本讀本　卷六

一　近郊の秋色

朝日、障子にあたりて蜻蛉の影あたゝかなり。世の人は上野・淺草・團子坂*とうかるめり。われも出でなんや、出でなん。病のつのらばつのれ、待たばとて出でらるゝ日の來るにもあらばこそ。『車呼びてこよ』といふ。やがて歸り來て『車は皆出はらひたり、遠くに雇はんや』といふ『さまでは今日の日和には足ある人ぞまづ車にて出でたるぞ』と笑ふ。

一時過ぎて車は來つ。車夫に負はれて乘る。成るべく靜に

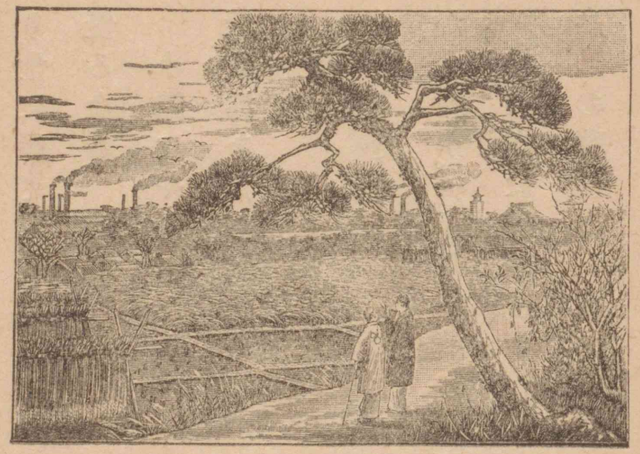
*上野の北根岸

挽かせて鶯*横町を出づるに、垣に咲ける紫の小さき花の、名も知らぬが目につく。

空忽ち開く。村々の木立遠近に連りて、右には千住の煙突四つ五つ黑き煙をみなぎらし、左は谷中・飛鳥の岡つづきに天王寺の塔聳えたり。見渡すかぎり眉墨ほどの山もなければ、平地の眺めの廣さ、我が國にては、これほどの處外にはあらじと覺ゆ。胸開き氣伸ぶ。

田は半ば刈らずあり。刈りたるは、皆田の緣に竹を組みてそれに掛けたり。我が故郷にては稻の實る頃は、田の面乾きて水なければ、刈穗は悉く地干にするなり。この邊の百姓は、おとし水の味を知らざるべし。吾には此の掛稻がいと珍らしく感ぜらる。榛の木にかけたるは殊に趣あり。其の上より森の梢塔*の九輪など見えたる更に面白し。

*天王寺の塔



道の邊に咲けるは蓼の花ぞ最も多き。其の紅の色の老いてはげかゝりたる中に、ところどころ野菊の咲きまじれる樣、ふるひつくばかりうれし。

我が車の響に野川の水のちら〳〵と動くは、目高の群の驚きて逃ぐるなり。あな、いとほし。目高を見るは野遊びのめあ

憎＝惡＝
疾

ての一つなるを、なべての人は目高ありとも知らで過ぐめり。世に愛でられぬを思ふにつけて、いよ〳〵いとほしさぞ優るなる。

小鮒にやあらん、すばやく逃げ隱れたる憎し。たま〳〵に蛭の浮きたるはなくもがな。

むかうより人力車來れり。見れば男一人乘りて前に藁づとを置きたり。其の端より黄なる實の漏れて見ゆるは、蜜柑か金柑か。一足、町を離るれば見るもの皆雅なり。

柿の樹に柿の殘りたるは、あちこちにあり。一つくひたし。烏瓜の蔓に赤き實の一つだに殘りたるを見ず。

目高多き小川を過ぐ。

*谷中と飛鳥山との間にあり

童二人、とある門の内より『人力人力』とわめく。

*諏訪神社の茶店に腰を休む。日傾き風俄に寒くなりたれば、興盡きて歸る。（正岡子規　ほとゝぎす）

文法　小鮒にやあらん
　蜜柑か金柑か　（疑問の助詞）

練習　左の語句を口語に改めよ。
　われも出でなんや出でなん
　待たばとて、出でらるゝ日の來るにもあらばこそ
　さまでは今日の日和には足ある人ぞまづ車にて出でたるぞ

二　公德と私德

德はもとただ一のみ。公私の分つべきものあるにあらず。然れども德を論ずるに當りては、公私の二者に分ちて其の

意義を明晰にするを便とす。公德は政治・經濟・外交・兵制等の事に關して釐革改造を圖り、社會の公利・公益を增進するによりて成り、私德は家にありて能く其の一身を修め、內に省みて、何等の疚しき所もなく、徹頭徹尾些の汚點をも留めざるによりて成る。公德と私德とは各自の身に取りて兩立すべく、偏廢すべからざるものなり。

釐革

徹頭徹尾

然るに公德あるもの、未だ必ずしも私德あらず、私德あるもの、いまだ必ずしも公德あらず。公德と私德とを兼ね有するものに至りては、いづれの處にか其の人を求めん。世間の廣きも、其の人の意外に少きは甚だ悲しむべきことなりとす。ただ公德か私德かいづれか其の一を有するものに至りては、未だ必ずしも少しとせざるが如し。

然るに、苟も私德あるものにして、私德に背くが如き所行は決してこれなかるべし。然れども公德を缺くことはこれなしとせず。ただおのれひとり善なるも、未だ其の本分を盡せるものにあらず。なほ進んで社會の公利・公益を增進することを務むるにあらざれば、よく盛德大業を成せりといふを得ず。善人はもとより其の私に就いて之をいへば、非難すべきものあることなきは論なし。然れども、ただ善人といふのみにては、其の社會を裨益すること公德の大なるものに及ばざるなり。この故に、私德の外なほ公德を期せざるべからざるなり。

然るに、公德あるもの或は私德を顧みず。卽ち公德あるを以て、これを表面におし立て、裏面においては、私德を破りつつあるもの甚だすくなしとせず。この故に、其のいふ所はただ公德に關することのみ。公德に關することにおいては、時に氣焰の揚ることなしとせざるなり。然るに私德に就いては毫もいふ所なし。蓋しこれをいふの權利なきなり。もし、之をいはば、其の內に感ずる所は、其のいふ所を非難せざるを得ず。誠に憫むべしとなす。この故に人の成すべきは、ただに公德のみならざるを知るべきなり。苟も私德なければ公德もまた頽る。

凡そいかなる社會の事業も、苟も公德と見なすべきもの

頽弊

歠然

蠹毒

は、公衆の福祉を增進する所以にあらざるはなし。然るに、裏面において私德を破る時は、その私德を破るがために周圍をけがし、その影響は隱然として波及することすみやかなり。げに頽弊は流行となりやすきものなり。故に一人惡しき行爲を始むる時は、他人これに感染し、漸々增大して遂に流行とならざるを必せず。たとへばなほ一箇の石を池水に投ずるに、はじめ歠然として波を生じ、ついで一彎一彎の波を重出して、遂に全池の水を動かすに至るが如し。

もし名望の地位にあるものにして私德修らざれば、その影響は數多の人を蠹毒するに足る。もし不幸にして、一世の注目する所に係る顯榮の地位にある者にして、私德修らず

竊＝私＝
陰＝潛

して悪事醜行あらんか、その及ぼすところの影響は意外に大ならざるを得ず。その下にある者皆竊に思はん、かの人だにかくの如き悪事醜行あり。われらごときものが、こればかりの不品行ありとも何ぞ咎むるに足らんやと、皆おのれが不品行を是認すべき口實と範圍とを發見し得るなり。かくの如くなれば、一代の道德は俄然頽廢してまた挽回すべからざるに至ることなきを保せず。この故に、たとひ表面において、いかなる公德あるも、裏面において私德修らざれば、是によりて社會を蠹毒すること甚だしからざるを得ず。果して然らば、眞にこれ功罪相償はざるものといふべきなり。

この故に、公德と私德とは兼ねて之を有することを期せざるべからず。卽ち公私一貫を以ておのれを律せば危きことなかるべし。然るに行爲の順序上よりこれをいへば、私德を以てはじめとなす。私德すでに備りて然して後公德を成すべきなり。いかなる公德を成すも私德なければ道德的性格を有するものとするを得ず。換言すれば、その成し得たる公德も、眞に公德たるの價値を有すること能はざるなり。この故に、私德は公德の基礎なりといふも不可なきなり。

（井上哲次郎）

文法　いづれの處にか其の人を求めん
何ぞ咎むるに足らんや　（反語）

練習　次の語句の意義を問ふ。
一代の道德俄然頽廢してまた挽回すべからざるに至らん

眞にこれ功罪相償はざるものといふべきなり

三　採蕈記

積雨始霽、爽氣可體。余便思採蕈之遊、飄然出廓。數里入山。松林森鬱、翠色欲滴。而苔徑飽雨、時聞微香。余欣然以爲、松蕈在近。偶有樵叟、手籃而來。亦採蕈者。余先進、排蒙茸而行。左右注視、一歩一顧、探索移時、未有一獲。脚疲意倦。就松下憩。

蒙茸

少焉、叟緩歩而至。蕈已盈籃。有如張蓋者。有如戴笠者。有如繭栗者。大小長短、錯落參差、香氣衝鼻。余謂叟曰、『吾之初入山、意謂若後于人、恐不能獲、故先叟而行。心忙足躁、終無所獲。』

錯落參差

叟俯不答、仰而大笑。蓋有諷意。記以存之。丙戌十月。

（土屋　弘）

諷意

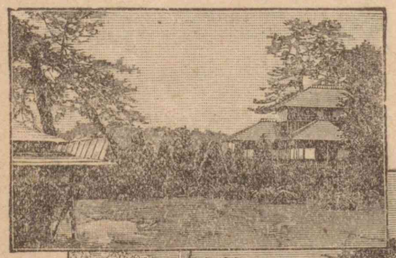
四　農人形

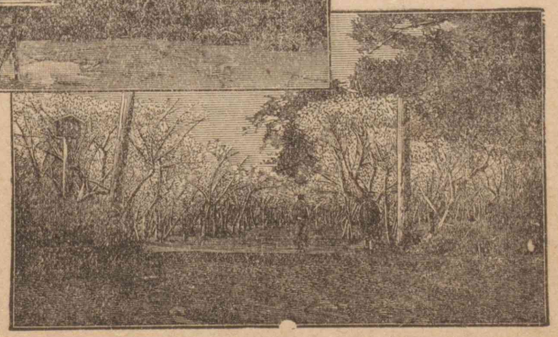
往昔繼體の帝が宣らせ給ひたる『一*婦織らざれば萬人凍え、一夫耕さざれば萬人飢ゆ』との聖詔は、申すも畏きことながら、今もなほ貴き勸農の訓として人々の仰ぎ奉る所なり。近江國高島郡なる安曇村は、帝がなほ皇位に卽き給はざりしころ、在住ましまし〻地と傳へらる。されば此の地の學校

*士有當年而不耕者則天下或受其飢矣女有當年而不績者天下或受其寒矣

にては、校歌の中にも此の事を詠じ、農會も亦此の事を援きて、永く大御心を奉戴せんことを一般に奬めつゝありといふ。近くは武門の治となるに及びても、諸侯の農を奬めたりし蹟の觀るべきもの亦甚だ多し。

水戸の常盤公園は、我邦三*公園の一と稱せらる。其の小高き丘陵に立つときは、仙波沼を隔てゝ、遠く一帶の郊野を雙眸の中に收むることを得べし。園はもと烈公德川齊昭





*兼六園（金澤）後樂園（岡山）偕樂園（水戸）

の創設せしところ、名づけて偕樂園といふ。蓋し民と偕に樂むの義に取れり。されば四時、常に民の來り遊ぶに任せ、綠蔭花下行廚を披きて一日の歡を竭さしめ、月下瓢を傾けて一夕の清遊を縱にせしめたりといふ。

烈公德川齊昭の肖像と眞筆

行厨

公園には今もなほ、素燒の人形を鬻げり。其の形や結髮の老農が積藁の側に跪坐して笠を其の前に置くの狀に取る。製法極め

跪坐

稼穡

て粗なりと雖も雅致に富む。世人呼んで『烈公の農人形』といふ。齊昭居常深く心を農事に致し、殊に稼穡の勞苦を察せり。嘗て銅を以て農人形を鑄しめ、常に之れを座右に置けり。其の食膳に向ふや、必ずまづ初穗の意を以て一箸の飯粒を之れに供へ、然る後に食するを例とせりといふ。或時のことなりき、

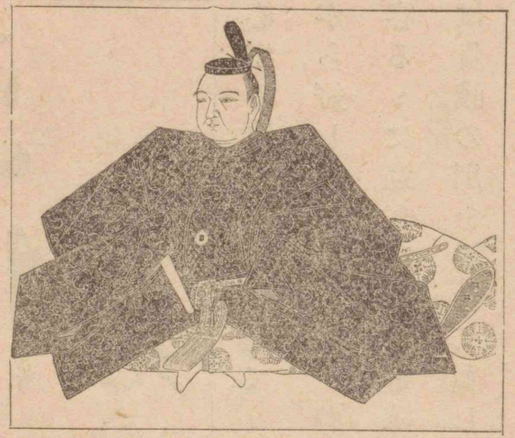
朝な〳〵飯食ふごとに忘れじな
　惠まぬ民にめぐまるゝ身を。

といふ一首の和歌を侍臣に與へていへらく『古より賢君は、民を見ることなほ慈母の赤子に於けるが如しといへり。されど、我は少しく之に異なりて、百姓をば我が乳母なりと懷ふ。我は百姓に向つて、何等の憐みをも施さざれど、百姓は我がためには生命を繫ぐべきものを與へぬ。その恩や乳母と何の擇ぶ所かあらん』と。

義公德川光圀の像

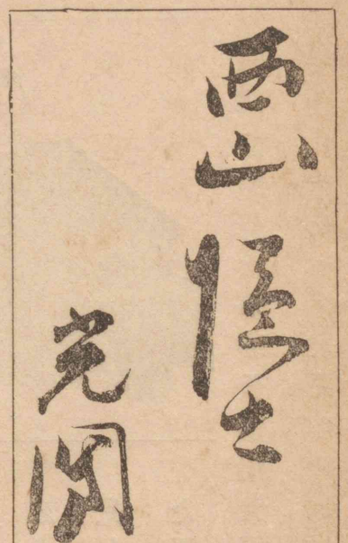
模造

菟裘



爾來侍臣等はこの農人形を呼びて『御百姓』といふに至れりとぞ。今鬻ぐところの農人形は、之を模造せしものなりといふ。

齊昭の祖先たる義公德川光圀も、亦嘗て菟裘の地を太田の鄕、西山といへるに擇びぬ。地は水戸を距ること數里にあ



德川光圀の筆蹟

監修

好＝佳＝
良＝善

り。夫のわが國第一の大著作と稱する大日本史は、實に公親から、此の地に編纂を監修せられたりといふ。庵を西山莊と稱し庭前に心字の池あり。池を隔てゝ谷あり、山あり、春秋の觀賞兩つながら好し。名づけて梅ヶ谷・觀月山といふ。室は廣さ十數人を容るゝに過ぎず。殊に書院との間に全く其の闔を撤したるは、貴賤の別を離れて親しく農民等と談話を交へんとするの意に出でたりといふ。齊昭の精神は多く光圀より來る。其の意を農事に用ふる、亦前後相承けつと謂ふべし。

文法　素燒の人形を鬻げり　（動作の目的を示す助詞）
烈公の農人形といふ　（動作の歸著する事物を示す助詞）

練習　一、左の語句の意義を問ふ。
一帶の郊野を雙眸の中に收むることを得
綠陰花下行厨を披きて一日の歡を竭す
月下瓢を傾けて一夕の清遊を縱にす
二、憎・惡・疾　竊・私・陰　の區別を問ふ。

（田園都市）

五　演說について

前略御免下さるべく候。先便演說の事申上げ候處。剛毅木訥仁に近し、言語辯舌の拙きは、却て士君子の品價を增すとの御書面、詳に拜誦仕候。御來書の趣旨一通り御尤の樣

相見え候へども、少しく時勢を御視察相成候はば、また大いに然らざる所も之あるべく候。

昔封建の時代、諸事皆古格・舊例に依りて嘗て變化あることなく、恰も世の中は溜り水の如き有樣なれば、人々の附合も狹く、或は人の性質によりて全く世との交際を絶ち、さして不自由をも覺えず、尙甚だしきは無口無言、態と殺風景にして、却て世に重んぜらるゝなどの奇談もありし事に候へども、是は昔の事にて今に通用すべからず。今日人事繁多の世に在りては、交際の法も亦繁多ならざるを得ず。交際の法繁多なれば、言語辯舌は第一の要用にして、中々以て等閑に附すべきものに之あるまじく候。

演說不自由にては、差向き世間の附合に差支あるのみならず、全體人の心身發達の旨にも戻る事と存じ候。其の仔細は、人の目も指も舌も等しく我が用を便ずる道具にして、此の諸道具をば成るたけ巧に用ふるこそ、發達の趣旨に之あるべく候。然るに舌に限りて其の鈍きを貴び、其の不自由なること愈〻增長し、啞の如くなりて始めて仁に近しの聖意に叶ふとは、如何にも受取り難き事に存じ候。若し此の理に相違之なく候はば、目の明も少しく曇り、指の働も稍〻不自由にして、漸く仁の道に近きか。盲目と中風病とは聖人の黨か。まさか左樣の事も之あるまじく候。

畢竟、孔夫子も別に思ふ所ありて敎を垂れしことならん。

聖人と雖も決して辯舌を賤むものにあらず。子貢*の辯は孔夫子も稱譽せられたる事なり。御勘考なされたく候。此の段貴答迄。　匆々拜具。

（福澤諭吉　中學讀本所引）

*孔門十哲の一人

六　蟲の聲

行水も捨て惜しむ秋の蟲乃聲。　（伊丹鬼貫）

鯛も花も見ぬ里を泊る夜の月。　（井原西鶴）

物言ふてくおびる蛍や秋乃風。　（松尾芭蕉）

化物も正體見あらは枯尾花。　（横井有也）

來年も來年も來年も來年まで。　（澤露川）

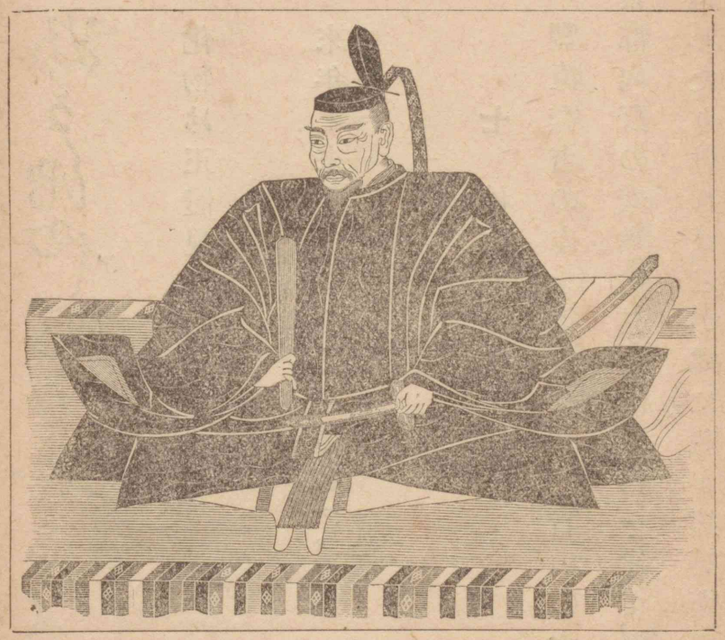
七　桃山時代の工業

豐臣秀吉の志を得るや、難波・石山の大阪城を始めとして、京都内野の聚樂・伏見・桃山の第を建て、續々として大土工を起したりければ、之が爲に我が建築術の上に大進歩を來し

貌貌

豐臣秀吉の像（高野山成慶院藏）

現見顯著露



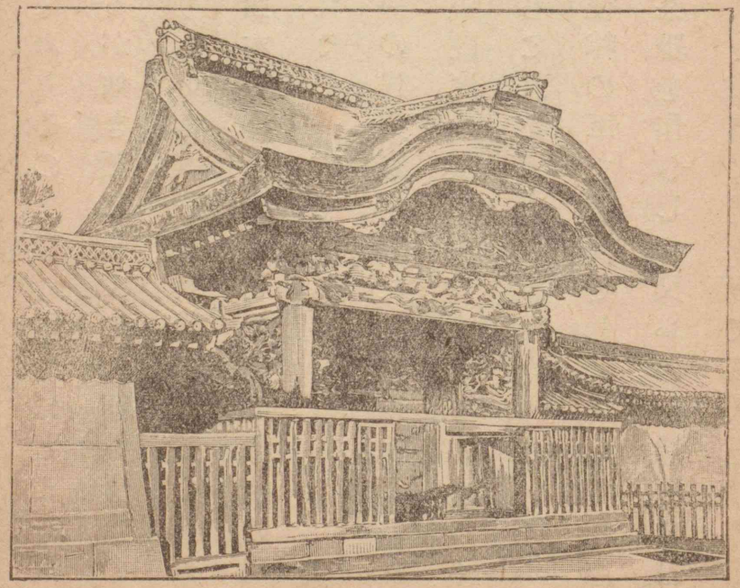
たり。殊に桃山御殿の建築は、文祿三年、かの十四萬の貌貌を叱咤して、韓の八道を蹂躙し武威を海外にかがやかせし頃なりしがば、その建築・彫刻等の上にも、豪邁の氣象自ら現れたりき。

桃山の建築につ

廊下

京都市西本願寺唐門

きては、今詳に、これを考ふべからずといへども、瓦の端を黃金にてぬり、百間の廊下に、黃金の燈籠を釣りたりなどいへば、その壯觀まことに想ふべきなり。山城・近江の邊には、桃山の式をうけて建築したりといふ寺院、今も存せるものありて、その式皆一定せり。例

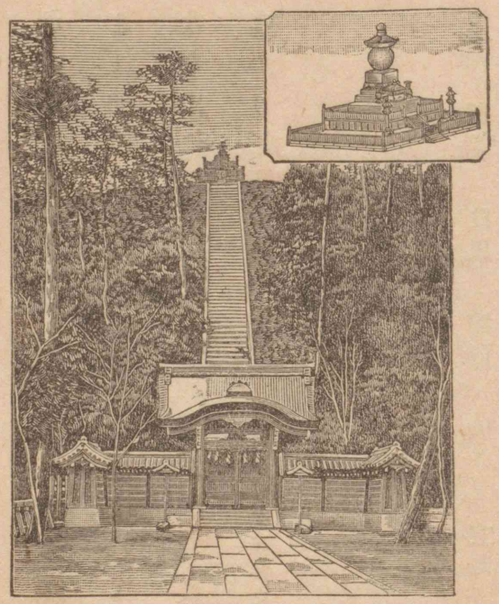


意匠

調度

へば長押・鴨居を黑漆にてぬり、その上に蒔繪をほどこし、又襖をば黃金にて貼りたるが如き類にして、これ卽ち秀吉の意匠に出でたるものなりといふ。又豐國神社の門扉の彫刻、桃山城にありしといふ西本願寺唐門など、桃山の遺物の現存するものあれば、就いてその一斑を窺ふべし。

秀吉は獨これらの外部の建築・彫刻等に、意を用ひしのみならで、茶器の類より衣服・調度の類に至るまでも、あまねく其の意匠をこらして、自らこれを工人に授けたりといふ。かの筑紫の陣中にありて、征韓の軍を指揮せし時すらも、佐志山に窯を築きて種々の茶器を作らしめ、又おのが意匠を日記に圖して、はるばるこれを京都に送り、以て茶入を燒かしめ、蒔繪をまかしめきとぞ。



京都市豐國神社（豐公廟）

かくの如く、彼は常にその意を工藝の上にそゝぎて、鋭意これが奬勵をつとめたりければ、京都・伏見の間には名工續々輩出して、一時工藝の隆盛を極めたりき。

その後豐臣氏敗れて德川氏の世となりしより、京都・伏見に居住せし豐臣氏恩顧の工藝家等は、散じて二となり、一は江戸に入り一は加賀に入れり。その江戸に入り

しものは、社會の變遷と時代の風尚とに連れて、後には全く桃山の遺風を失ひしかど、その加賀に入りしものは、北陸の別天地にありて、桃山の遺風を子孫に傳ふることを得たり。これ加賀の美術工藝の特色にして、世は江戸將軍の時代となりぬれど、加賀蒔繪・加賀象眼などと稱して、賞翫するもの多かりし所以か。（横井時敬　日本工業史に據る）

家屋名稱

礎　柱　棟　梁　桁　庇　軒　長押　鴨居　敷居　榱

廊下　破風　欄間　天井　玄關　床　押入　戸棚　緣

壁　納戸　格子　垣　籬

八　白石篤朋

新井白石少入木下順庵門、學成不得志。順庵欲薦諸加賀岡島仲通。加賀產。亦順庵門子也。聞之戚然語白石曰、予負笈遠遊、若干年于茲。比得家書。老母日逼衰頹、倚閭侍予歸。每一念至、百感攢心。如幸賴吾先生先容、得釋褐于本藩、則願足矣。白石、卽告順庵。以此言曰、予求仕何國之擇。請、舍予薦彼。順庵歎曰、世衰道微、日入偷薄。如子絕無而僅有者。乃推岡島于加賀。後二年、擧白石于甲斐府。時年三十七。（先哲叢談）

九　示諸生

一

休道他鄕多苦辛。　同袍有友自相親。
柴扉曉出霜如雪。　君汲川流我拾薪。

二

遙思白髮倚門情。　宦學三年業未成。
一夜秋風搖老樹。　孤窗欹枕客心驚。

（廣瀨建）

一〇　運命（一）

世の中の出來事の來りて、我等の運命を左右にするもの、その數日に百千のみならず。然れども我等がこれを認め得るは、ただその表面に顯れ實際に結果を生ずる一半のみ。その來らんとして來らず、殆ど己の上に附著せんとして遂に附著せず、そのまゝに消えゆく出來事は、また實に夥しかるべし。もし我等が暗々裡なる、これらの出來事を認め得んには、われらの生涯の望と畏とは、まことに無限無邊ならん。ダビッドのこと以て見るべきなり。

われ等はダビッドの既往を知らず、又知ることを要せず。我等は今ただ二十歳の少年が、始めて故鄕の田舍を離れ、ボストン府に行きて、商家の手代とならんとする途上にある彼を見るのみ。彼の履歷は小學校及び實業學校にて、一通り

徐＝靜

の教育を受けたりといふのみにて事足るべし、田舍少年の心安さは、車も借らず、馬も借らず、日出より歩き出でて既に日中に至れり。時はこれ夏の半、漸く覺ゆる疲勞と、ます〳〵加る暑熱とは、彼をしてかたへなる樹蔭に休息し、乘合馬車の來るを待ちて、これに投ぜんと決意せしめたり。

鬱蒼たる幾株の喬木、丘の上に立ち竝び、ほとりには又清らかなる泉の湧き出づるあり。たとひダビッドならずとも、往來の人、誰かこの日中に此の樹蔭に遇ひて、一度憩ふことを懷はざらん。ダビッドはまづ泉の水に渴きたる喉を潤し、徐に負ひたる包を解き下して、その上につぎはぎせる木綿の手拭を重ねかけ、これを枕として仰臥せり。太陽の光はう

陶然

落＝墮＝墜

寓目

ちかさなれる枝に遮られてダビッドの身にいたらず、往來の路は、昨日の大雨に濕ひたれば少しも塵を飛ばさず。生ひ茂れる綠の草は、絶好なる蓐よりも快く柔なり。泉の水は沸々として常に耳邊に鳴り、縱横せる枝は、そよ吹く風の爲により〳〵微搖す。ダビッドは忽ち心陶然とし、恍惚たるうちに、身はいつしかうまいの裡に落ちぬ。

ダビッドは樹蔭に眠り居たるが、途上には、或は馬に跨り、或は車に乘り、また或は、歩みてダビッドの前を往來するもの點々たり。或者は、わき目もふらず過ぎゆけば、彼のこゝに在ることを知らざるなり。或者は、たま〳〵彼のこゝに横れるに寓目すれども、己が心の忙しき思念におほはれて、別に

輳＝聚＝
集

心にも留めず過ぎ行くなり。或者は、彼の無邪氣に眠れるを見て笑ひつゝ去るもあり。或者は、その路傍に眠れるを卑みて眉しかめつゝ往くもあり。非難・稱美・一讃・一譏、すべてダビッドに輳れり。

やがて一輛のはでやかなる輕車ありて、毛色うるはしき二頭の馬を縻ぎ、轔々として馳せ來れるが、この樹立の前にいたりて突然止りたり。そは一本の轄ゆるみて、一箇の輪に狂ひを生じたればなり。車中にありつるは商人夫妻にて、齡高く品よき人なり。老夫妻は從者が輪を整ふる間、樹蔭に憩はんとて立ち寄りたるが、その下にダビッドの横れるを見るより、俄に驚きて二三歩後にさがりたり。ためつ、すがめつ、

しばし凝視し居たりしが、やがて心を安んじたりけん。このうまいせる少年を驚かさざるやう、忍び足して再び樹蔭に立ち寄りつつ、夫は妻に低語せり『あの快げに眠れるさまを見よ、あの呼吸する氣息の極めて容易なるを視よ、これ健康にして心やすらかなるものにあらざれば能はざ

邂逅

るなり。もし余をしてかゝるうまいを得しめば、余はわが歳入の半を割くとも惜しからず』と。

妻は今、風のために一方の枝の推しやられ、一條の太陽の光、少年の面に漏れ注ぐを見て、みづから手を伸べ、縺れたる枝を解き、これを蔽ひやりながら又夫に低語せり『天はこの好少年をわれ等に與へ給ふらし。我等が從弟の子の所行に失望せる後、偶然この樹蔭にたち寄りて、この少年に邂逅するは、まことに不可思議ならずや。かつ熟視すれば、何となく面さし逝きしヘンリーに肖たるやうなり。試に彼を喚び醒さんか』と。夫はうち案じて『そは何の爲めぞ。我等はまだ少年の素性をも知らずして』といへば、妻もやゝ惑ひながら尙も

思ひ入りて、さりながら『かの無邪氣なる容貌、かの無心に眠れる姿よ』といひぬ。

今や一個の莫大なる福はダビッドの上に臨めり。この老夫婦は、ただ一人の子ヘンリーを先立たせ、家に蓄へし巨萬の富を相續せさすべき者もなく、せめては遠き從弟の子にと目ざしてこれを尋ねしに、その子は所行不良にして心に適はず、今失望してボストン府に歸るなりけり。人はかゝるときに當りては、さまざまの想像をも描くものなり。妻は再び反覆せり『試に醒さんか』と。同時に背後に從者の聲あり『修繕整ひぬ』と。

老夫妻はこの聲に忽焉として我に復り、相携へて車上に

身を置けり。ダビッドはなほ齣々然たり。

齣々

一　運命（二）

老夫妻を載せたる輕車は去りて、また一里は行かざるべしと思ふ時、また二人の漢ありて、この樹蔭に立ちよりたり。木綿の頭巾を目深に被りたれば、審に見るべからざれども、顏の色いたく黑くして、衣服粗野に、且こゝかしこに幾多の汚點をさへ印してあり。これはこの邊に徘徊する山賊にして、今その贓物を頒たんとてこの樹蔭に來れるなり。かくてダビッドの横れるを見るより、一人は疾くも他の一人に『汝はあの枕にせる包を見ずや』と囁けば『されど、もし目を覺したらば』といふを、一人は急に懷中を探り、匕首の柄をすこし露して『これのみ』といふ。やがて二人はダビッドのほとりに進み寄り、一人はその匕首を拔きて胸に擬し、一人は頭の方にまはりて、その枕とせる包をぬかんとす。この二人の顏、もしダビッドをして目を開きて見しめば、直ちに以て惡魔とやなさん。この時忽ち一頭の白犬あり。鼻をうごかして、頻に地を嗅ぎつゝこゝに走せ來れり。ひとりの賊は目ばやくこれを見つけていへり『やめ、やめ、かの犬の主人ついでこゝに來るならん』と。

贓物

一人は匕首を懷中に藏めたり。一人はブランデー一壜を取り出せり。仕事の將に成らんとして敗れたるを笑ひのゝ

藏―收―納

搖動　轟々轢轆

しり、互に幾口かを飲むうちに、各黑き顏に一種の紅を生じ來れり、後にはダビッドのことは忘れて、がやゝとうち興じつゝ、相携へてまた彼方へ出で行けり。しかもダビッドはなほ鼾々然。

一時間の眠はダビッドの疲勞を醫し盡せり。ダビッドはすこし身動きせり。徐にその脣を搖せり。聲はなけれど口の中にひとり半殘の夢を語れり。をち方に起る輪聲、既にして殷々、既にして轟々、益近くして益高く、今や轢轆として尺寸の間に來れり。これ一輛の乘合馬車なり。ダビッドは俄に躍り起てり。『これ御者、こゝに旅客あり』『上層に席あり』ダビッドは馬車の上層に登り坐せり。ダビッドは前途多大の望をか

顧眄

けたる樂しきボストン府に馳せ往けり。かの清泉には一顧眄の別をだになさずして。

一たびは富の神のこゝに來りて、黃金の光その水面に照射せることもありしは、ダビッド知らざるなり。また一たびは死の神のこゝに來りて、その水上に血を染めんとせることもありしは、ダビッド知らざるなり。嗚呼、彼は生涯遂にこれを知らざるなり。（森田思軒　ユーゴー小品）

文法　笑ひつゝ去るもあり（動作の同時に起ることを示す）
別をだになさずして（輕きをあげて重きを言外にあらはす）
汚點をさへ印したり（事物の添へ加りたる意を示す）

練習　一、左の語句を解釋せよ。
忽ち心陶然として恍惚たり

非難稱美一讃一譏すべてタビッドに轅れり
聲はなけれど口の中にひとり半殘の夢を語れり
かの清泉には一顧眄の別をだになさず

二、轔々　殷々　轟々　を含める三つの短文を作れ。

一二　座右ノ銘

一　父母ヲイトホシミ、兄弟ニムツマジキハ、身ヲ修ムル本ナリ。本カタケレバ末シゲシ。

一　老ヲ敬ヒ、幼ヲイツクシミ、有德ヲ貴ビ、無能ヲアハレム。

一　忠臣ハ國アルコトヲ知リテ家アルコトヲ知ラズ。孝子ハ親アルコトヲ知リテ己アルコトヲ知ラズ。

一　祖先ノ祭ヲ慎ミ、子孫ノ教ヲ忽ニセズ。

慎＝謹。敬＝肅

一　辭ハ中ルベクシテ誠ナランコトヲ願ヒ、行ハ敏クシテ篤カランコトヲ欲ス。

一　善ヲ見テハ法トシ、不善ヲ見テハ誡トス。

一　怒ニ難ヲ思ヘバ悔ニイタラズ。欲ニ義ヲ思ヘバ恥ヲトラズ。

一　儉ヨリ奢ニ移ルコトハ易ク、奢ヨリ儉ニ入ルコトハカタシ。

一　樵夫ハ山ニトリ、漁夫ハ海ニ浮ブ。人各ソノ業ヲタノシムベシ。

一　人ノ過ヲイハズ、ワガ功ニホコラズ。

一　病ハ口ヨリ入ルモノ多シ。禍ハ口ヨリ出ヅルモノ少カ

ラズ。

一　施シテ報ヲ願ハズ、受ケテ恩ヲ忘レズ。

一　他山ノ石ハ玉ヲ磨クベシ、憂患ノコトハ心ヲ磨クベシ。

一　水ヲ飲ンデ樂シムモノアリ、錦ヲ衣テ憂フルモノアリ。

一　出ヅルヲ待ツベシ。散ル花ヲ追フコト勿レ。

一　忠言ハ耳ニサカヒ、良藥ハ口ニ苦シ。（中根東里　東里外集）

一三　物薄而情厚

置酒　甃漆

司馬溫公曰、先公爲郡牧判官、客至未嘗不置酒。或三行、或五行、不過七行。酒沽於市、果止梨・栗・棗・柹・肴止於脯・醢・菜羹、器用甃漆。當時士大夫皆然。人不相非也。會數而禮勤、物薄而情厚。

近日士大夫家、酒非內法、果非遠方珍異、食非多品、器皿非滿案、不會賓友。常數日營聚、然後敢發書。苟或不然、人爭非之、以爲鄙吝。故不隨俗奢靡者鮮矣。嗟乎、風俗頹弊如是、居位者、雖不能禁、忍助之乎。（小學）

一四　乃木將軍

つはものゝ　武勇なきには　あらねども
眞鐵なす　ベトンに投ぐる　人の肉
往くものは　生きて還らぬ　强襲の
ほこさきを　しばし轉じて　右手のかた

圖上なる　標の高さ　二零三
いただきの　ふたつ聳ゆる　石山に
たえだえの　望の絲を　懸けてこそ
きのふけふ　軍の主力を　向けてしか

霜月の　三十日の　夕まぐれ
將軍は　高崎山の　師團より
ただ一騎　柳樹房なる　本營に
歸らんと　曲家屯をぞ　過ぎたまふ
ほの暗き　道のほとりを　見たまへば
身うち皆　血に塗れたる　卒ありて

そびらには　はやこときれし　將校の
亡骸を　かきのせてこそ　立てりけれ

汝は誰ぞ　そは何處にか　負ひてゆく
聞し召せ　背負ひまつるは　奴わが

主と賴む
乃木將軍の
愛兒なり
年老いし
將軍の家の
二人子

そのひとり　勝典ぬしは　いちはやく
南山に　うたれ給ひて　殘れるは
おとうとの　保典のぬし　ひとりのみ
背負へるは　その一人子の　亡骸ぞ

父君は　心をゝしく　我が主をも
隊附の　まゝにあらせて　討死の
身の果は　おのれと三人　葬をば
ひと時に　營めと宣り　たまひしを
人々の　强ひて計らひ　つるにより
さいつ頃　友安旅團　副官に

旅順の忠魂碑

職かはり　まだ程經ぬに　この朝げ
あへなくも　空しく骸と　なりましぬ
果てましゝ　處は高地　二零三
目鏡もて　敵の備を　望みます

うら若き
額のただ中
打貫かれ
ひと言を
のたまはん
ひまもなく

持口の　南の峯に　うせたまふ
その骸を　奴脊負ひて　この村に
ありと聞く　野戰病院　たづぬれど
くるほしき　心からにや　たづねえず

かくいふを　駒をとどめて　聞きましゝ
將軍は　病院の旗　ある方を
鞭あげて　彼方にこそと　さし給ふ
面ざしは　たそがれ時に　見えねども
目ざとくも　雲の絶間に　覗ひし
さむぞらに　まだ輝かぬ　冬の星

毀＝誹＝
謗＝譏

更闌けて　友なる星に　將軍の
睫毛だに　動かざりきと　語りけり。

（森　林太郎）

一五　毀譽

毀譽は人の大節なり。世擧りて譽むとも必ず察すべし。人こぞりて毀るとも必ず察すべし。況んや一人は譽め一人は毀るをや。たとへば訟事あらんに、兩方理なりと思へばこそ互にいひつのりてやまざるなれ。これを奉行のさばかんに、一人は勝ち一人は負くべし。勝ちたる人は奉行を譽め、負けたる人は毀るべし。

月代

又惡しき人なりとも、それにともなふ人は、これを善しと思へばこそ交るなれ。我が善しと思ふをば譽め、我が惡しと思ふをば毀る習ひなれば、その毀譽によりてその人の善惡を分ち難し。おなじ一盃の酒ながら、上戸は醉ひておもしろきものなりといひ、下戸は醉ひて苦しきものなりといふ。まして人傳などに聞かんは覺束なきことなり。

昔人ありて、その子をある寺へ遣はし置きけるに、暫くありてにげ還りぬ。さて住持のことを誹りていふやう『我に月代剃れ』といひければ、例の如く剃りけるを、剃りやうのわきて惡しとて、さんざんに叱らる。あるとき我が厠に行きけるを見て『何とて厠には行きしぞ。不屆なり。向後厠に行くべからず』といふ。其の後、朝飯たかんとて味噌をすりけるに、これも『味噌をするがきこえず』といふ。理不盡の次第、殆ど困窮におよぶといふ。

理不盡

眠＝睡

親聞きて『さりとては出家にあるまじき事なり』とて、いそぎ山に登り、右の事ども語る。住持聞きて『いやく、、さやうの事にてはなし。常々髪よく剃る故、このごろ剃らせけるに、いたく眠りて、これ見たまへ、この如く切り込み候ふ』とて、これを見す。その上厠も常の厠へは行かで奥なる隱所へ行き。味噌も常の味噌をさしおきて客へ使ふべきをつかふ。これらの指南をこそかへすがへすもいたしつれ』と申しけるにぞ、親もことわりにぞ服しける。

信濃の國薗原（そのはら）といへる處に木あり、遠くより見れば箒のかたちの如し。よりてこれを箒木（はゝきぎ）といふ。されど近づきて見れば、箒に似たるところもなく、うち繁れりとかや。誠に遠くより見聞くと、親しく見聞くとは、多くは此の箒木の類なるべし。

凡そ人の物を批判するも、わが好むところをこそ褒むるものなれ。俠士に歌よむ人の評判せさせ、日蓮宗に眞宗の評判せさせんに、いかでか公論あるべき。同じ道を二人して行かんに、一人は健にして此の道近しといひ、一人は疲れて遠しといはん。これ道にちがひあるにあらず、心にちがひあればなり。

*信濃の伊那郡にあり

批判

褒＝譽

また例へば義經のことを論じて、義經をよしと思ふ人のいはんには『此の人誠に幼より常人にてはおはせざりけり。ともに天を戴かざる讎を報ぜんと、夜々院を出でて劍を擊ち、遙かに秀衡が人となりを見て、之により、飛鳥も落つるばかりの勢の平家を二三年のうちに攻めほろぼし、亡父の恥辱をすゝぎ、法皇の宸襟をやすめ奉り、再び絶えたる源氏をおこし、兄頼朝を天下の武將と仰がしめたり』といふ。又義經に不滿なる人は『なるほど此の人戰爭一通りは自由を得たる人ながら、平氏を亡ぼし、恣に忠盛の女を納れ、梶原景時と詮なき口論、大將たらん人のしわざに似ず、腰越より追ひかへされしもいはれなきにあらず。然るに都に逃げのぼりて

(一)源朝義

(二)後白河法皇宸襟

(三)相模國

賴朝追討の院宣を申しうけ、芳野山にてはひとりの靜にわかれかね、兒女子の涙をしぼられしなどいふ。

一人の義經すら、善しと思ふ人の論と惡しとおもふ人の論とは、まことに雪と墨と異なるべし。その惡しきところを捨て善きところを取る、これ人を用ふる道なり。その惡しきをば惡しとし、善きをば善しとする、これ公の論なり。また其の分々の相應につきていふことあり。鼠を甚だ大なりといふとも、牛の小さきにも及ばじ。蛇を甚だ短しといふとも、蚯蚓よりも長かるべし。人を善しといひて譽むるも、惡しといひて毀るも、其の場其の場を考ふべし。（三浦梅園　梅園叢書）

文法　都に逃げのぼりて。賴朝（事の移り行く意を示す助詞）

鳴＝啼＝泣＝哭

常の厠へは行かで
親もことわりにぞ服しける
よしと思へばこそ交るなれ

（ずでの約りたるもの）
（多くの事物の中より一つを拔き出す意の助詞）
（ぞ。よりもその意強し）

一六　吾が家の富

家は十坪に過ぎず、庭はただ三坪。誰か云ふ狹くして且陋なりと。家陋なりと雖も膝を容るべく、庭狹しと雖も碧空仰ぐべし。

神の月日は此處にも照れば、四季も來り見舞ひ、風・雨・雪・霰かはるがはる到りて興淺からず。蝶兒舞ひ、蟬鳴き、小鳥遊び、秋蛩また吟ず。靜かに觀ずれば、この世の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆ。

廣潤
博汎
寛弘

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば青白き花開いて樹に滿つ。風ある日には、青々と霞める空より白き花ちらちらと舞ひて、一庭須臾に雪を散ず。隣家に花樹多し。風に隨ひて飛花わが庭に墜ち、紅雨霏々白雪紛々たり。仔細に見れば、桃の花あり、櫻の花あり、椿の花あり、李の花あり。

庭隅に一株の山梔あり。皐月闇鬱陶しき頃、香しき白花を開く。主も妻も無口なれば、この花のわが家に開くは宜なりけり。

老李の背後に一株の碧梧あり。その幹亭々として聳え、わが如く直かれと敎ふるに似たり。手水鉢の側なる金剛纂と共にその葉廣うして、わが家の雨聲を多からしむ。

遺殘
貽

「つくつくぼうし」の聲に、世は何時か秋に入りて、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃え出で、唯一株前の家主の植ゑ遺したる黄菊も咲き出づ。名苑の花美しと云ふとも、秋のあはれ寂びたる趣は、却つてわが庭の一枝にあるべし。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くして滿樹金よりも黄なり。木枯の風起れば、扇の如きその葉翩々として翻り落つ。半夜夢覺めて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も庇も手水鉢も處として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ち添ひて、寸金と人は云ふなる錦を、我は庭に敷き詰めぬ。

木の葉落ち盡しては流石に寂しげなれども、日影・月影い

よいよ多くなりて、空を見星を見るに障すくなきは嬉し。

（德富蘆花　自然と人生）

練習　一、左の語句を解釋せよ。

紅雨霏々白雪紛々たり

樹葉翩々として翻り半夜夢覺めて雨かと疑ふ

名苑の花美しと雖も秋のあはれ寂びたる趣は却つて我が園の一枝にあり

二、誰かいふ　宜なり　を含める二つの短文を作れ。

三、鳴泣・啼哭　眠・睡　藏・收・納　の區別を問ふ。

一七　孺子可教

留侯張良、謝病辟穀曰『家世相韓、韓滅爲韓報讎。今以三寸舌爲帝者師、封萬戸侯、此布衣之極。願棄人間事、從赤松子遊耳。』

良、少時、於下邳圯上、遇老人。墮履圯下、謂良曰『孺子下取履。』良欲毆之、憫其老、乃下取履。老人以足受之曰『孺子可教。後五日、與我期於此。』良如期往。老人已先在。怒曰『與長者期後何也。』復約五日。及往、老人又先在。怒復約五日。良半夜往。老人至、乃喜、授以一編書曰『讀此、可爲帝者師。異日見濟北穀城山下黃石、卽我也。』旦視之、乃太公兵法。良異之、晝夜習讀。既佐高帝、定天下。帝封功臣、使良自擇齊三萬戸。良曰『臣始與陛下遇於留。此天以臣授陛下。封留足矣。後經穀城、果得黃石焉。奉祠之。』（十八史略）

一八　紹介・註文

一　友人を紹介す

粛啓　この手紙持参の方は佐藤翁とやうす仁にて高等工業学校の出身に有之迂生とは年来の知己に付同君は数年前より農具及び器械改良に一身を委ね其の考案に成れるもの既に数種に及び居れ然るに此回又種便なる一器械を発明して専賣特許を得候常の好評に有之候間は先生に面謁を願ひ

深く御つきに批評を仰ぎ度切望の由にて特に迂生に紹介を依頼致されに付中年恐縮に接見下されいはば光榮に奉存候　敬具

二　商品棚の註文及び返事

拝啓　愈々御清榮大慶に存上候扨弊店商品棚二個別紙図面の通り至急御製新度候甲は柾樹二ス塗内面青洋紙普通の拵にてよろしく候へども乙は正面に飾り付くるものにて洋漆を用ひ少々美術的に新度候者は何日

頃近小金部出来上り可申ゐ尚又代金の處折
返し御一報被下度依先右御注文まで草々
拝復　昨日も絨緞御注文仰せ下され難有存
じ候然處御注文の品は當地金く品切と相成候
ゆ付當地同業者中ふそれぐ聞合せ申候へども
見當り申さず依て此模様は少こ異なり候へど
も地質色合とも略同様の品ゆ付或を御間ふ合ふ
事もやと存じ見本を持せ差上ゲ値段其外委細
の儀ゆ子代のもの舌頭ふて申上ぐべく候　頓首

數量名稱

帶一筋　眞綿一包　鰹節一連　末廣一對　掛物一幅　酒一樽
肴一尾　衣服一著　金一封　書籍一部　茶器一揃　菓子一折

一九　歳暮

幼き時は月日の過ぐることの遲きに堪へず、『稚子慇懃向人問、睡過幾日是新正』。齡長じて漸くその速なるを感じ、更に長ずるに及び『來年は來年はとて暮れにけり』の感あり。又更に長ずるや、白駒の隙を過ぐるの歎あること愈切、遂に顧みて恍として夢の如くなるに至る。時間に差なくして感情に差ある事また甚だしと謂ふべし。かくの如きは種々の事情に由來すべけれども、その主たる所由は、言ふ迄もなく人事

破敗＝壊傷

の閑忙如何に在り。

幼時は簡單なる遊戯を事とし、日に同一事を繰返すに止まり、何事か單調を破るものあらんを望み、節供・祭日を悦ぶと同じく、歳末・年始をも悦び、頻にその到來するを待つ。漸く長じて爲すべきこと多きを加へ、動もすれば日を忘れ、改歳を思ふこと隨つて薄し。更に長ずれば從事する所の業務益〻繁く、或は二三年に跨るあり、或は一層長きあり。數年に亙るが如きは事業の完成を待ちこそすれ、歳末・年始に何の興味を覺えず、唯『又か』と云ふに過ぎず。

歳末・年始に重きを置くは、其のなほ幼稚なる時の事にして、長ずると共に之を輕んずる傾向あり。日月の過ぐるを忘

烏兎匆々

(一)服部南郭

(二)兵書

(三)米國の軍人

憮然

るゝは、爲すべき事業の多きが故にして、烏兎匆々を歎ずるは、寧ろその人の爲に祝すべし。境遇に順なるあり逆なるあり。憂慮の餘り事を忘るゝもあれど、多數の上よりすれば、日常に忙殺せらるゝなり。

されど、四季の循環は昔日の如し。人皆寒暑を感ずる上は、全く歳末・年始を度外視する能はず。南郭の徂徠の許に年賀に赴きしに、蓬髪垢面にして滔々孫子を論ずるに會ひ、その儘に辭し去りしが如き、強ち咎むべきにあらざるか。而もジョン、アダムスが、壯時、日誌を記し、十二月末日に至り『今年何事を爲しゝかを省みて憮然たらざる能はず、明年は大いに黽勉せざるべからず』といひしも、面白からずとせず。

練習　一、左の語句を解釋せよ。

白駒の隙を過ぐるの歎あること愈切なり

蓬髮垢面にして滔々孫子を論ず

往事を省みれば憮然たらざるを得ず

二、次の文に誤あらば正せ。

紳士とは如何なる人をいふや

鳩にさへ三枝の禮あり

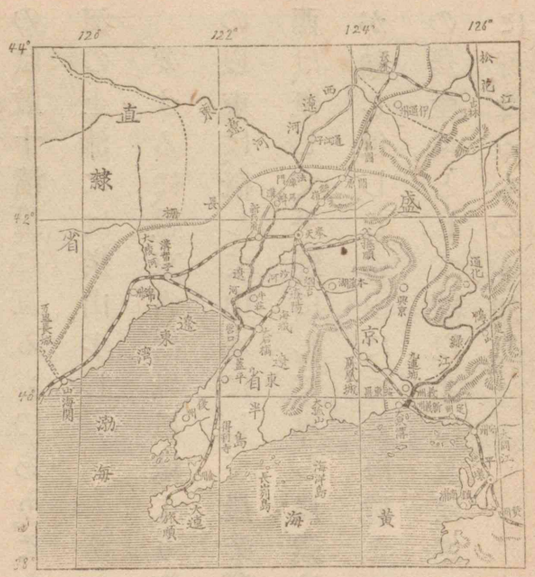
雨の降ると降らぬを問はず

論語と孟子の註釋を讀む

（三宅雪嶺　題言集）

二〇　滿洲の農業

滿洲に於て我が邦人の農業を起すべき處は盛京省なり。而して、其の盛京省中にありても最も有望なる地は、南遼東半島より北奉天附近、東渾河を溯りて懷仁・通化の邊までとす。もとより其の事業の種類・目的の如何により、自ら土地の選擇を異にせざるを得ず



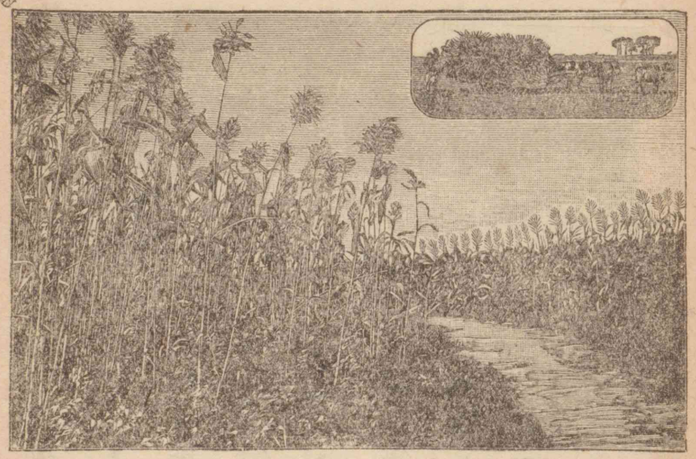
鳳凰城及び寬甸附近は、何れも高峯峻嶽相連なり、山高く溪深く、樹木鬱茂し、虎豹の如き猛獸も棲息せり。この地方一帶は恰も我が熊本阿蘇附近の如く、火山の跡にして、山岳魂磊として聳え、地味極めて瘦せたり。

懷仁より通化にわたりては、石綿を産する處多く、猛獸も亦少からず。渾河の沿岸には葦を栽培すること夥しく、廣きものは數十清里に亙るものあり。それより大孤山附近の大洋河の上流には炭山多し。

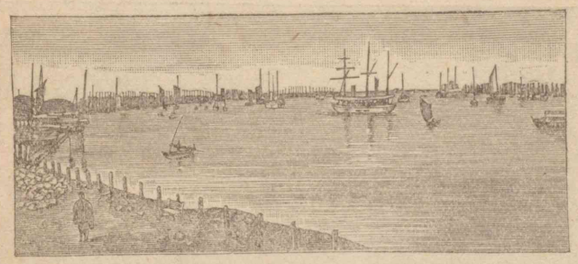
要するに、盛京省は鳳凰城より塞馬集等を中心として、その以東は、概して山地にして農業・蠶業に適し、而してその以西は、概して平野にして專ら農業地として恰好の土地なるが如し。但しこの中にても、海城より以南は土地痩せて、純粹の農産地としては以北に及ばざるべく、ただ果樹を植うるに可なるものゝ如し。

海城以北は土地に多少の波狀こそあれ、一望千里ともいふべき平野にして、ただ一枚の畑地にても十數町に亙り、我が日本の内地にては想像するに難きばかりなり。しかして地味亦南方に比して甚だ饒なり。これ全く遼河の影響にて、海城より以北の地は、遼河の支流殆どその全部を濕し居るといふも可なるべく、これによりて土地肥沃にして、作物生育の狀況亦頗る好良なり。

高粱の繁茂と其の運搬



滿洲に於ける農作物の主なるものは、高粱・大豆・小豆・粟・馬鈴薯・陸稻等にして、その他の野菜類は我が日本と大差なし。就中、滿洲人の常食とするところの高粱・粟等は最も多く耕種せらる。此等の外、副産物として、麻類・綿・藍・烟草等の産物あり。その海外に輸出せらるゝものは、大豆及び其の糟にて、滿洲物産中の第一位を占む。これに次ぐを生絲となす。大豆は年々芝罘に集まるものゝみにても二十萬石を下らず、而して此等奉天以北の物産は、一たび奉天に集まりて新民廳に出で、更に汽船にて遼河を下りて牛莊を經、營

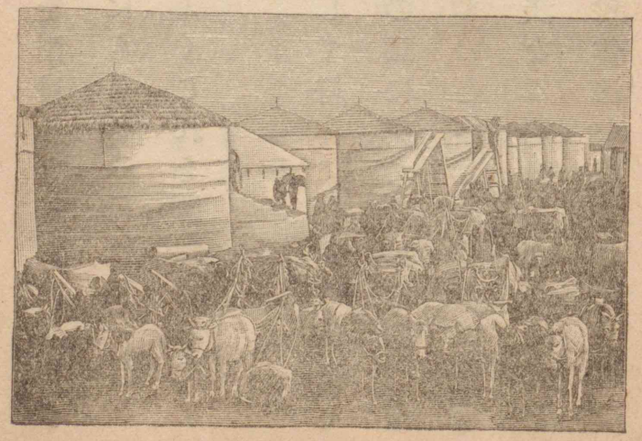


營口河頭の圖

營口に於ける大豆粕の積置場

口に出で、それより或は直接に、或は芝罘に出でて輸出せらるゝを常とす。

滿洲の農業を見るに、彼等は人力によるよりも馬の力によること多し。滿洲には馬多く、いかに貧窮なる家にても二三頭の驢馬なきものなく、多きものに至りては、普通の馬と驢馬とを併せて十五六頭より二三十頭を養ふ。これを或は耕作に、或は貨物の運搬に、或は大人・小兒の外出に使用す。又彼等の馬を使役するに熟練



なるは實に驚くべきものあり。貨物などを運搬するに、一臺の荷馬車に四五頭乃至十二三頭を附け、そを一人にて御するを見る。これ一は馬の柔順なるにもよるべけれど、一は又彼等が小兒の時より馬を友とし、よくこれを馴致せるによれり。

かく馴致せる馬を幾頭も使役して耕作に從ふが故に、その成績實に見るべきものあり。この點に於ては、日本の内地よりもたしかに一進歩をなせるものといふべし。ただ惜むべきは、彼等が、かく廣漠にして肥沃なる地味と、この良馬とを有しながら、昔よりなし來れる耕作法を墨守して其の改良をも加へず、又肥料の如きも殆ど之を施さざれば、徒に勞して收穫少く、しかも、その質の粗惡なるを免れざる事これなり。若しこれに改良を加へ、肥料を施さんか、如何なる農産物にても、十分なる收穫を得ること難きにあらざるべく、その成績更に大いに見るべき者あらん。要するに、滿洲は土地廣大なれば、大農的仕掛には最も適當の地といふべし。

（伊藤一二　太陽）

文法　南遼島半島より。（動作の始を示す助詞）
北懷仁・通化の邊まで。（動作の終を示す助詞）

練習　「就中」「しかも」を含める二つの短文を作れ。

二一　尊德翁夜話

一

執著

人道はたとへば水車の如し。その形、半分は水流に順ひ半分は水流に逆ひて輪轉す。全く水中に沈みなば廻らずして流るべく、全く水を離るればめぐる事なし。かの佛敎にいはゆる知識の如く、世を離れ慾を捨てたるは、たとへば水車の全く水を離れたるが如し。

又凡俗の敎義も聽かず、義務も知らず、私慾一偏に執著するは水中に沈めたるが如し。いづれも社會の用をなさず。されば人道は中庸を貴ぶ。水車の中庸はよろしきほど水中に入りて、半分は水に順ひ半分は流れを出でて、輪轉滯らざるにあり。人の道もかくの如く、天理に順ひて種を蒔き、天理に逆ひて草を取り、慾に隨ひて家業を勵み、慾を制して義務を

中庸

思ふべきなり。

二

世上一般、貧富苦樂といひさわげども、世上は大海の如くなれば是非なし。ただ水を泳ぐ術の上手と下手とのみ。舟を浮べて用便する水も、舟を覆されて溺死する水も、水にかはりはあらず。ただ時によりて風に順風あり逆風あり、海に荒き時あり穩かなる時あるのみ。されば溺死をまぬかるゝは泳の術一つなり。世の海を穩かに渡る術は、勤と儉と讓との三つのみ。

三

松明盡きて手に火のつく時は速に捨つべし。火事ありて

伐＝切＝
斬＝斫＝
剪

危きときは荷物は捨てゝ逃ぐべし。大風にて船くつがへらんとせば上荷を刎ぬべし。甚だしき時は檣をも伐るべし。この理を知らざるを愚といふ。

四

山芋掘は山芋の蔓を見て芋のよしあしを知り、鰻つりは泥土の樣子を見て鰻の居る居らぬを知り、良農は草の色を見て土の肥瘠を知る。みな同じ。謂はゆる『至誠神の如し』といふものにして、永年刻苦經驗して發明せるものなり。技藝に此の事多し。侮るべからず。

五

世の中刃物を取り遣りするに、刃の方を我が方に向け、柄の方を先の方にして出すは、これ道德の本意なり。この意を能くおしひろめば道德は全かるべし。人々此の如くならば天下平かなるべし。それ刃先を我が方にして先方に向けざるは、その心萬一過あるとき、我が身には疵をつくとも他に疵をつけざらんとなり。萬事かくの如く心得て、我が身上をば損すとも他の身上に損はかけじ、我が名譽は損すとも他の名譽には疵をつけじといふ精神ならば、道德の本體全しといふべし。これより先はこの心をおし擴むるにあるのみ。

（二宮翁夜話）

文法・此の如くならば天下太平なるべし。（假定の意を示す助詞）
全く水を離るれば めぐる事なし。（確定の意を示す助詞）

全＝完

勳閥　鑣　輸贏

二二　青木方齋

越前侯秀康之就封也、聞阿閉掃部、爲勳閥之士、以重祿聘之。狛伊勢亦越之世臣也。將爲其子行擐甲之禮、請掃部爲賓。禮畢置酒。

伊勢謂掃部曰、『今日豚兒擐甲之初、願子語當年之武功、以祝兒前程。』掃部曰、『吾豈有武功可語乎。無已則有一焉。吾嘗見一士武風最可觀者矣。賤嶽之役、兩軍既散、吾單騎沿余吾湖而退、有一騎呼於後者。回鑣接之、則曰、朝來所殪皆雜兵矣。不幸未遇好敵。觀子儀容、果非凡士。敢請一戰決輸贏。余曰、諾。下馬將交槍。其人曰、請俟之須臾、我槍鏃矣。沒鋒於湖、洗之者二。曰、『可以戰矣。』於是相鬬。雌雄未決、而日已昏黑。乃呼曰、可恨槍鋒難辨、請期他日。子爲誰。身是青木新兵也。後日相見、戎閒、誓不付勝負於他人矣。揚鞭而別。吾結髮從軍、未嘗見從容整暇如此之士。』

言未畢、有青木方齋者、自屏後出、謂掃部曰、『側聽吾子話、懷舊之涙不能自禁。吾子亦不記乎、爾時與君交鋒者、卽此翁也。』掃部拍掌曰、『契闊久矣。今日相遇、何其奇也。』乃舉觴屬之、好以腰刀。由此青木之名顯于一時。侯聞而聘之、與掃部同其秩祿。

（大槻清崇）

二三　地方自治

富士山の高きも、その基は人の注意せざる麓の細砂・小土にあり。國家の組織如何に大なりとも、その基は市町村にあり。われらの住居する市町村の政治は、卽ち國家の發動する淵源なり。されば市町村を愛せずしてその國を愛し、その市町村に力を致さずしてその國に力を致すといふものありとも、余はいまだこれを信ずること能はず。

地方に府會あり、縣會あり、郡會あり。人民が選擧したる議員および參事會員ありて地方政治に參與す。かくて府縣も郡も、人民みづから其の府縣郡を治むる形跡あるが故に、自治體といふことを得べし。然れども、府縣には知事あり、郡には郡長あり、皆中央政府の行政權を代表したる官吏にて、この官吏が府縣郡を治むるものなれば、純然たる自治といふべからざるものあり。人民みづから決議し、人民みづから實行せらるゝ眞の自治體は市町村にあり。

およそ市にせよ、町にせよ、村にせよ、日本人民にて其の區域内に住居するものは、卽ち市町村の住民にて、公共の費用にて建設したる營造物、および共有財産を共用する權利あり。如何なる人なりとも、適當の年齢ならんには、市立・町立・村立の小學校に其の兒童を入るゝ權あるが如きことをいふ。

二十五歳以上の住民にて、獨立して一家を構へたる男子が、その市町村に住居すること二年以上にて、幾何なりとも

直接國稅

市町村の費用を分擔し、幾何なりとも地租を納むるか、もしくは所得稅其の他の直接國稅二圓以上を納むるものは公民といはる。公民たるものは、市町村會の議員を選擧し、議員に選擧せらるゝ權利あり。また市にては參事會員の如き名譽職に選擧せらるゝ權利あるものは、これを辭すること能はずと定めたり。これ市町村は自治體にて、自治體を經營するは市町村民の義務なるが故なり。

かくて、公民の選擧したる議員あひ集りて、市會・町會もしくは村會を組織す。右の會議にて市長・町村長及びこれを助くる助役を選擧す。市會にてはこの外また市參事會員を選擧す。

支辨

和解

また市町村會の權限は如何なるかといふに、市町村の費用にて支辨する事業を行ふべきや否やを議し、歲入と歲出との豫算を定め、而してやむを得ざる事情によりて、經費が豫算に超過したる時これを認定し、法律・勅令にて定むるものゝ外、使用料・手數料・町村稅・夫役及び現品の賦課徵收法を定め、共有不動產の賣買・交換等をなし、市町村に係る訴訟・和解に當る事など、市町村の政治は一切これによらざるものなし。

自治機關の權力は以上の如く大なるものなるが故に、萬一その權力を害用するものあらんには、住民の禍害はいふべからざるものあらん。たとへば、昔は市町村に勢力ある人

雷同

鄰保

濫費

民が、或一人をゆゑなく嫌惡する時は、多數人民もこれに雷同して、公私・大小の事その人を妨害し、遂にその人を市町村の外に退去せしめずんばやまざらんとしたること少からざりき。國法によりて權利を定められたる市町村會が、かかる排他の精神にて政治を行はんには、自治制の根本たる鄰保團結の一事は全く行はれざるに至らん。

かつ又最も注意すべきは、地方の事業を擴張すと稱して、漫に事業をおこし、その間に濫費を生じ、地方人民の負擔を重くする一事なり。この弊は市町村會のみならず、府縣會にても最も甚だしきを見る。例へば府縣會議員の選出せられたる町村に、便利なる道路を作らんが爲に、その急務なると

否とを問はずして事業を始め、府縣會議員の選出せられざる町村に對しては、正當の理由あるにも係はらず、一切便利なる事業を開始せざるが如きことは往々見聞する事にて、かくの如きは、善良にして公共心に富む良民のなすべき事にはあらず。自治制の根本は鄰保の共同團結にあり。共同團結の基は寛容・交讓にあることを一日も忘るべからざるなり。

歐米にては、一代に盛名ある政治家・將軍・學者等が、老年に至りて鄕里に歸休するや、或は郡長たり、或は市町村長たり、或は府縣會・市町村會等の議員となりて、力を地方政治に用ふるもの少からず。かゝる人知れぬ所に力を用ふるものあ

りてこそ、國家の基礎は牢固として定まるなれ。されば力を一身・一家の外に及ぼさんとする者は、まづ手近くて最も人民の禍福に關係ある自治體の政治に力を用ひざる可らず。

（谷越與三郎）

練習 一、次の語句の意義を問ふ。

鄰保團結　不動産　賦課徴收法　寛容交讓

二、次の假名を漢字に改めよ。

センキヨ　メイヨシヨク　ランビ　フタン

二四　狩野芳崖

維新の際、英邁の士多く防・長の間に出で、政界はいふに及ばず、畫界にもまた森寛齋(一)・狩野芳崖等の名家あり。特に芳崖

(一)京都の畫家。徹山の養子となる。四條派の畫をよくす。明治二十七年歿す。

不羈

は明治繪畫の基礎を立てたる斯道の恩人なり。

芳崖は世々畫を以て長州豐浦藩に仕へし家に生れたり。年壯にして江戸に出で、狩野勝川に學ぶ。勝川は幕府の繪師にして、其の家塾には多くの子弟を養へり。されど當時繪畫の道久しく振はず、師弟いづれも古風を墨守して清新の氣に乏し。芳崖その間に出で、橋本雅邦と共に同門の獅子王と稱せらる。芳崖は性不羈にして、尋常の繩墨を以て律せらるべくもあらず。意の往くまゝに筆を縱にすれば、諸生は目して狂人とし、勝川もこれを厭へども、如何ともすること能はざりき。

幕末の世、國事多端にして、藝術の士は容易にその職に就

渾沌

くことを得ざりしかば、芳崖は空しく鄉里に歸りぬ。されど、防長の地は紛擾最も甚だしく、芳崖も亦筆を拋ちて銃砲鑄造の事に從ひぬ。明治の世となりて後は、家祿を奉還し、養蠶・製絲の業を始めたれども、幾ばくもなく失敗して、一家の窮乏いふばかりなかりき。

維新の變は、延いて萬般の事物に劇變を生じ、國民はすべて物質的文化の改善に忙しくして、藝術の如きは愛玩の暇なければ、畫界も渾沌たる有樣にて、纔に文人畫・西洋畫などの喜ばるゝあるのみ。有爲の畫家も、或は官に雇はれて器械畫を書き、或は少許の賃を得て友禪染の下繪を作り、すべて生活に困難を極めたれば、斯道の光明はいつ輝くべしとも覺えざりき。

明治十二年、芳崖は意を決して再び東京に出で、人の勸によりて五十幅の畫を作りしかど、表裝の價すら拂ふものなく、久しく大道の露店に曝されたる果は、田舍めぐりの道具屋に賣りて、僅かに三圓の金を得たりといふ。或時は砲兵工廠の圖案課に雇はれんとして試驗に落第し、或時は陶器の下繪をかきて少許の日給に飢を凌ぎしこともありて、その上に病をさへ得て、一家の窮乏は益〻甚だしく、譬ふるにものなかりき。

幸に舊友雅邦が島津家より犬追物の繪卷物の依賴を受けて、それを芳崖に讓れるあり。芳崖はこれによりて一時餬

狩野芳崖先生の肖像と其の絶筆（美術學校藏）

東京美術學校本校及び校舍

遭遇合會

口の道を得たり。されど、その妙技は未だ世に顯れず。明治十五年、第一回繪畫共進會の開かるゝや、その畫く所の畫一幅を出ししが、更に世人の注目を惹かざりき。その不遇眞に憐むべし。されど、偉人は艱難に遇ふ毎に益猛進するものなり。芳崖謂へらく、『美術は一國人文の粹にして、繪畫は又美術中の主なるものなり。これを振興せざれば、未だ以て文明を誇るに足らず、繪畫の振興を計るは實にわが職分なり』と。

當時、國民は、歐米の文化に心醉して、古來の藝術を蔑視し、動もすれば曰く、『日本畫は色彩の種類少くしてその法も拙ければ、到底彼の油繪に敵すること能はず』と。芳崖曰く、『これ能はざるにあらず爲さざるなり。疑ふものは余が畫を見よ』

と。乃ち工夫を凝らして執金剛神の鬼を捉ふる圖を作れり。設色の巧、千變萬化、燈光錦帳に映じて金碧燦爛たり。見るもの愕然としてその妙技に驚き、繪畫の革新期して待つべしとせり。

芳崖みづから繪畫に勵むとも、もし己の志を繼ぐものなからんには、死後の遺憾これに過ぎじ。學校を設けて子弟を養ふは目下の急務なりとして、其の設立を計れり。適伊藤公その畫を見てこれを愛し、書を裁して芳崖を招く。芳崖喜んで曰く、『機至れり』と。乃ち公の邸に至る。公偶門を出でんとす。芳崖その袂を控へ留めて曰く、『政治には閣下あり、繪事には芳崖あり。繪事については閣下もわが言に耳を傾けざるべ

絶筆
粉本

からず』と。滔々として說くこと數時間に亙りぬ。かくて明治二十一年十月、政府は東京美術學校の設置を決し、芳崖をしてその日本畫の主任たらしめぬ。

惜しむべし、芳崖は播種せしのみにして未だ秋收を見るに至らず。開校に先だちて病急に重く、同年十一月五日、六十一歲にして歿しぬ。絶筆は、慈母觀音の圖にして、その粉本と共に美術學校に藏す。端麗なる菩薩の尊容、仰ぐべく拜すべし。苦心凡そ一年、死するの前五日その業を了へぬ。かくして絶世の偉人は一生悲境に苦しみたりといへども、明治の畫界は其の指導によりて振興せり。芳崖もまた地下に瞑目すべきなり。（藤岡作太郎）

駑馬
騏驥

文法　みづから繪畫に勵むとも。（假定の意を示す助詞）
製絲の業を始めたれど。も。
五十幅の畫を作りしかど。（確定の意を示す助詞）

練習三　次の語句の意義を問ふ。
性不羈
繩墨を以て律すべからず
歐米の文化に心醉して我が藝術を蔑視す
古風を墨守して清新の氣に乏し

二五　駑馬千里

駑馬可二致千里一耶。曰、可。何以知二其可一也。吾聞之荀卿氏。曰、『騏驥一日而千里。駑馬十駕則亦及之矣。』使荀卿妄人耶、則已。荀荀卿之非妄人耶、則必不敢欺後人也。然則十

駑駘　阜櫪　俠氣　碌々

駕之術如何。曰「鞭」之鞭」之。鞭」之而又鞭、今日行十里、明日行十里、行行不」息、百年如」一、必至」所」志、斃而後已、其是庶幾及」之與」。予駑駘也、而有」志於千里。以古人爲」鞭、揮」之以」氣、以追」騏驥之風」。寧中道而斃不」願蠢蠢然怗耳乎阜櫪間」也。（鹽谷世弘　宕陰存稿）

二六　冒險

世に處する七分の俠氣なかるべからず。しかも俠氣のみならず、又何人にも幾分の冒險心あるを要す。苟も冒險心のみありて常識なくんば、これ無謀の狂夫のみ。もし常識にのみ富みて冒險心なからんか、またこれ碌々たる凡骨に過ぎざるべし。人生の要は、七分の常識に三分の冒險心を調合するを以て適當なりと爲すべきが如し。

遁辭

人間は活動せざるべからず。而していはゆる用心家なるものには、思案に日を暮らし、何等の活動をも爲さずして、空しく一生を終るものあり。愼重の態度など謂はば如何にも立派に聞ゆれども、時としては臆病者の遁辭たることなきにあらず。

およそ社會も國家も、廣く謂はば人類も、いはゆる用心家に負ふところ鮮くして冒險家に負ふ所多きは、古今の歷史實にこれが證人たり。新世界の發見者たるコロンブス(一)にせよ、或は喜望峰を週りて印度への航路を開始したるバスコ(二)、

(一)伊太利の航海家
(二)ポルトガルの航海家

夢想

洞觀

ダ、ガマにせよ、苟も人類の恩人帳にその名を登錄せらるべき資格あるものは、必ず幾分の冒險的血液その血管中に流れざるものはあらず。看よ、露國の中亞細亞及び西比利亞に膨脹したるは誰の力ぞ。英國の印度大帝國は何人の手によりて建立したるぞ。米國民の中央の大原野を横斷し、太平洋方面に蕃殖したるは何者の先導に出でたるぞ。これ豈かの用心家輩の夢想する所ならんや。

いかに天資聰明なる人と雖も、人既に神にあらず、焉んぞ未然を悉く洞觀するを得んや。故に深く思ひ、審に慮り、而してその既に得たる所を以ていまだ確めざるところにおよぼし、善にもあれ、惡にもあれ、みづからその結果に對する責

遲疑

輕舉妄動

任を負ひ、斷々乎としてこれを決行すべきのみ。再言すれば、知慮を以てこれに處し、知慮の及ばざる所は勇氣を以て、卽ち冒險心を以てこれに處すべきのみ。吾人は當初より閉目せよとは謂はず、苟も視力の達する所は飽くまで之を正視せよ。しかもその及ばざるに際しては、低徊遲疑するを須ひず、宜しく暗中の飛躍を試むべきなり。

然りと雖も、もし謀るべきを謀らず、吟味すべきを吟味せず、徒に輕舉妄動を爲すが如き者あらば、これあに吾人の本意ならんや。嗚呼、あに吾人の本意ならんや。（德富蘇峰）

文法　西比利亞に膨脹し（動作の移るべき事物を示す助詞）

印度への航路を開始（方向を示す助詞）

練習　一、左の語句を解釋せよ。

碌々たる凡骨　無謀の狂夫　臆病者の遁辭

低徊遲疑するを用ひず

二、伐・切・斬　遭・遇・合・會　教・誨・訓　の區別を問ふ。

二七　島國の利害

文化の發達に隨ひて、人類漸く自然にうち勝つとはいへ、其の占領せる土地の位置・形勢より多少の影響を受けざる國はあらず。或は氣候の寒暖により、或は土地の肥瘠により、或は地勢上、山岳・海洋等の有無によりて、各國それぞれ特殊の風俗・習慣・思想を有するに至るべし。地勢が種々なる文化を作る唯一の原因たらざるは、固より明らかなれども、その

紀元前五五
一〇六六

堡障

大なる要素の一たることは否定し難し。しかして、これら種種の地勢は、勿論各その得失を有するが中につきて、今四面海を環して、しかも大陸に程遠からぬ所に建ちたる島國は、地理上いかなる特色を有するかを述べん。

およそ島國は、山岳もしくは沙漠に圍繞せられたる國よりも、四鄰より來寇せらるゝ憂少きが上に、國民の團結極めて鞏固なれば、よく獨立自由を保つことを得。かつ四方へ航行して通商植民をなし、容易に他國の文物を輸入する利を有す。時に、たまたまシーザー、及びウイリアムの英國を征服したる如きことあれども、少くも敵の來襲に便ならぬ暴風・怒濤は、よく島國の堡障となりて外寇を禦ぐに力ありしな

(一)忽必烈

(二)鄭成功

(三)倣＝做＝習

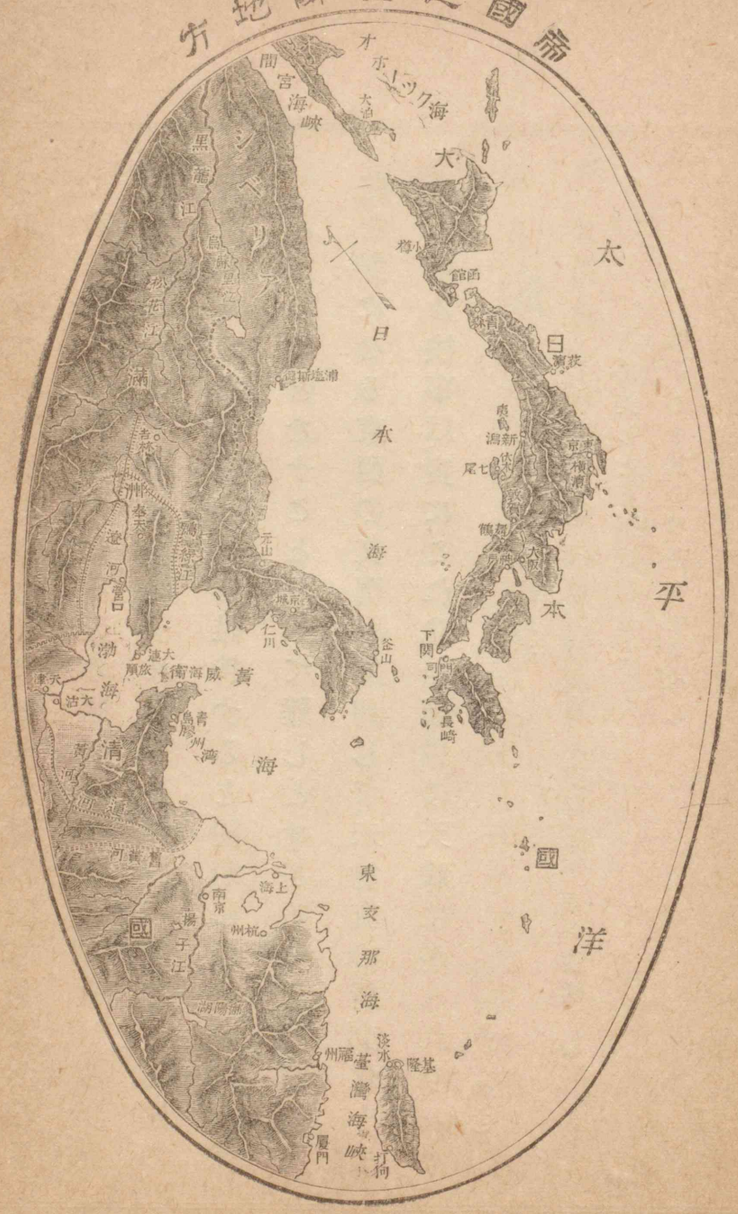
り。

わが國が、かの亞細亞全土を蹂躙せし元(一)主の膽を奪ひ、長く覬覦の念を絶たしめしが如き、明朝の遺(二)臣の臺灣に遁れて恢復を謀りしが如き、佛教徒の孤島錫蘭に據りて遂に東方に教旨を流布せしめしが如き、いづれも島國の比較的安全なるを證するものなり。しかのみならず、島國の人民は自國を愛し、その風習を美とし、漫に他に倣はず、故に往々創造的

嫌忌

にその文化を發達せしむ。

されども、島國は此の自然の利益を享くると共に、亦その弊害にも陷り易し。かくの如くにして其の國民は、外敵侵寇の害のみを知りて修交の利を忘れ、務めて他と交渉を避け、國を鎖して遂に國運を傾けしむるに至る事あり。然らざるも、島國はかの大陸諸國と異なり、諸種族の交通頻繁ならざるを以て、隨ひてその人民の性質多くは異族を嫌忌し、甚だしきは之を國外に驅逐せんと欲し、他を抑壓しても自己の利を失はざらんことを務む。又島國はその境域狹隘なる故、人口の增殖するに隨ひ、大陸よりも速かにその自然の富源を用ひ盡し、通商・植民し、又は新に領土を得るに非ざれば、經



時ニ賴

濟上・政治上に災變を生じて、遂に衰亡するに至ることあり。

地理學者の說く所ほぼかくの如し。亞細亞大陸の外に孤立せるわが帝國も、久しくこの島國地理的利害を蒙ることを免れざりき。かくて近時交通機關の發達が距離を短縮せしより、昔時島國の天險と恃みし風濤も、今は堅固なる堡障たること能はざるに至りたれど、さればとて强鄰なきが爲によりて衰ふる憂もなく、天然の富源も少からず。屬領も廣ければ未だ人口の過多を訴ふるを要せず。ましてや世界無比の國體を有し、國民の團結最も堅く、しかして海上の交通は東西洋を連結せるを以て、その島國の利益はます〳〵ここに發展せられんとす。嗚呼、かゝる島國の利を具備せるも

の、世界いづこにか其の比を求むべき。我等日本國民たる者、よろしくまづ此の大なる天の賜を拜謝せざるべからず。

そも海洋は一國を隔離すれどもこれを閉鎖せず。島國の人民も其の自己の特長を維持すると同時に、國外の美を採り自家の物となすこと敢へて難しとせざるべし。發達の逕路を異にせる東西の文明を鎔和して、未曾有の新文化を生ぜしむる快事は、實にこれ我が國民の天職にかゝれり。

（磯田良　國士）

練習　左の文に誤あらば正せ。

もし御意見も候へば御遠慮なく申越し下され度候

花は美しとも吾は植ゑじ

悔ゆるも其の甲斐なかるべし

いふ事は易きも行ふ事は難し

空中樓閣　誤解　實務

二八　生徒諸君

少壯なる生徒諸君の中には、その將來について、腦裏常に空中の樓閣を描き、何事も學問によらざれば大成せられざるものと誤解し、頻に高尚なる學術を修めんことを希望せらるゝものなきに限らざるべし。かくの如きは一般少壯者に免れざる通患なりといへども、その見解の誤謬なることは、老生が多年養成したる高等商業學校出身者の實驗によりて、明らかにこれを證することを得べし。

試にこれを彼等の上に見るに、彼等高等商業學校出身者が世に出でて實務につくに當つて、その最も痛切なる必要

大立物

を感ずるは、學校にをりし時、卑近の事なりとしてこれを學ぶことを喜ばざりし學科の知識なり。たとへば簿記の如き、習字の如き、算術の如き、英語の如きこれなり。およそこれ等諸學科の知識は、彼等が實務家として世に立つのはじめに當りて、劈頭第一にその必要を感ずるところのものなり。しかして彼等がやがて社會の大立物となりおほせたる後においても、これらの學問はなほその必要なる意味を改めざるなり。

おもふに、生徒諸君が本校に學ばるゝ所以は、その終生の事業となさんが爲なると、或はまたよつて以て一時立身の階梯となさんが爲なるとに論なく、とにかく商工界の事務

家たらんとするにあるべし。校長はじめ當事者諸君が熱心に本校經營の勞を執らるゝ所以も、また有爲なる實業家を養成せんとするにあるべし。果して然らば、老生は敢へて諸君にすゝめていはんとす、諸君はみだりに高尚なる學科にのみ走ることなく、まづその必要なる學問を勵まざるべからず。

かの高尚なる理論を講究して、放言高論、虹の如きの氣焔を吐きて一世を驚かし、よつて以て一時の虛名を博するが如き例は、客氣に富みて經驗に乏しき少壯者には極めて愉快の事なるが如くなるべけれど、かくの如きは、わが商工界に實際何等の效益をも與ふるものにあらず。本校の目的既

陳腐

に實行の人をつくるにありて、言論の人をつくらんとするにあらず。すなはちこゝに養はるゝ諸君も、また虛名に就くことを避けて、實利を收めんことを期せざるべからず。

生徒諸君。諸君はまたその一面に於て、大いにその操行を愼まんことを心がけざるべからず。かくの如きは言甚だ陳腐に屬し、諸君の家庭において、既に父兄の諄々としてこれを說かれたるところなるべく、本校の規則またその上に相當の制裁を設けられたるべく、老生がこゝに事新らしくこれをいふの要なきが如し、しかも老生が特にまたこれをいふ所以のもの、その事の極めて重大なるを以てなり。

諸君は、ただに嚴格なる校紀の表面においてその品行を

誘掖
婆心

正しうすべきのみならず、その裏面においても亦よくその行ひを愼むの用意なかるべからず。世には、少壯者が裏面の行爲は、他に發表せらるゝものにあらずと思ふものあり、これ大なる誤なり。たとひ、いかなる隱微なる所爲なりとも、その種々の關係によつて、有意・無意の間に必ず人の知るところとなるものにして、諸君はこれが爲に將來世に立たんとするに當つて、その大なる妨害を受けざるべからず。甚だしきに至つては、遂にその一生を誤らるゝことあり。

これ老生が多年少壯者を誘掖したる實歷上、特にその事實を認めて、敢へてこゝに婆心を披瀝する所以なり。

（矢野二郎　早稻田實業學校開校祝詞による）

實業
新日本讀本　卷六
終

大正三年十二月十六日印刷
大正三年十二月二十日發行

實業新日本讀本
改正定價
一、二、三、四　各金二十五錢
五、六、七、八　各金二十七錢
高級用一、二　各金二十七錢

大正六年度臨時定價金貳拾九錢

著者　六盟館編輯所
發行者　東京市日本橋區鐵砲町三番地　合資會社六盟館
右代表者　杉本七百丸
印刷者　東京市京橋區弓町二十五番地　高橋郁

發行所　東京市日本橋區鐵砲町三番地　合資會社六盟館
電話開通神田一三六四番　振替口座東京一二五五〇番

特約大販賣所　大阪市南區心齋橋筋一丁目　松村文海堂
電話長南九番　振替口座大阪四三二番

印刷所　東京市京橋區弓町三　協印刷株式會社

広島大学図書
2000054285